中信

松本本社 信毎メディアガーデン
〒390-8585 松本市中央2-20-2
電話 0263-32-2830 FAX 0263-32-2831

安曇野支局 〒399-8205 安曇野市豊科5935-1
電話 0263-72-2120 FAX 0263-72-2502

塩尻支局 〒399-0738 塩尻市大門七番町8-10
電話 0263-54-3227 FAX 0263-54-3769

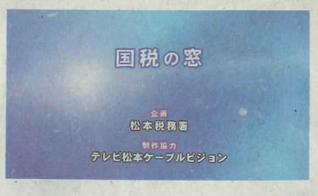
大町支局 〒398-0002 大町市大町4343
電話 0261-22-0240 FAX 0261-22-9038

木曽支局 〒397-0001 木曽郡木曽町福島5084 広小路プラザ2階
電話 0264-22-2114 FAX 0264-21-1101

気軽な美術刀剣専門店
刀処 ㈱永和堂
米沢臣長運斎綱俊 天保四年十二月日
四寸六分 保存刀剣 20万円
長野市昭和通り ☎026-228-0001

ケーブルテレビ コミュニティーFM これがおすすめ!

国税の窓
（YCS 19日前6・30、10・00、11・00他）
毎回、松本税務署の職員が出演し、税金に関する疑問や生活に役立つ税の知識などを分かりやすく解説します。昭和58年11月から毎月続く長寿番組です。



朝日村週刊ニュース
（AYT 22日前10・00、11・00他）
朝日村でこの1週間に起こった出来事やイベント、話題などをお届けする週刊ニュースです。番組では、皆さまからの情報をお待ちしています！取

歴史をつなぐ
中信の「100年企業」 8

創業430年超 時代に合わせ鋳造する物変化

教訓糧に 転換期乗り越える

ヤマトインテック

塩尻市

鉄くずを炉で溶解し、大型装置で鋳型に勢いよく注ぎ込む。自動車部品の鋳造を主力とするヤマトインテック（塩尻市）の工場では、溶けて流れる鉄がまばゆい光を放つ。「時代時代で（自社の）浮き沈みはあったが、鋳造業の需要は不滅だった」。中国・上海出身の元金融マンで、以前の経営者に請われて昨年5月に社長に就いた邵宗義（シャオジンイー）さん（53）は力を込める。

織田信長が明智光秀に討たれた本能寺の変の2年後、1584（天正12）年に初代松本城主に相模国（現神奈川県）から招かれた浜伊右衛門清賢（きよかた）が城下で興した鋳物屋がルーツ。創業430年超という、県内の老舗企業でも有数の歴史を誇る。

創業後、天皇の勅許（ちょっきょ）を受けた「勅許御鋳物師（ちゅうもじ）」として武具や仏具、鐘などを手掛けた。明治時代に入ると農機具や製糸用機械の部品にシフト。1946（昭和21）年に合資会社「大和製作所」となり、53年に株式会社化された戦後は、精米器の部品やバイクのブレーキドラムが主力となるなど、時代に合わせて鋳造する物を変えてきた。62年に塩尻市の工場誘致に応えて松本市から現在地に移転。91年に現社名に変更した。

ヤマトインテック　自動車のエンジン部品を主力に鋳造から機械加工まで手掛ける。2021年3月期の売上高は約37億円。従業員は約300人。

鋳造工場で事業の展望を語る邵社長＝塩尻市

飛躍のきっかけは、71年に県工業試験場（現県工業技術総合センター）と共同開発した「Vプロセス造型法」だ。ビニールの膜で砂型を密閉し、内部を減圧して造型する手法で、大型アルミ製品の鋳造に向く。同社は軽くさびにくいアルミ製品の生産を新たに始め、バブル期の高級志向も追い風に、住宅の門扉やフェンスといったエクステリア分野で成長した。

だが、バブル崩壊後の不況でエクステリア市場が頭打ちとなり、業績が悪化。次の柱を探す中で注目したのが、かつて得意とした鋳鉄だった。鋳鉄部門の生産ラインなどに積極的に投資し、エンジンの出力を高めるターボチャージャー（過給機）用部品など自動車分野に特化していく。

浜家が天皇から賜ったとされる幡（はた）

ターボチャージャー向けには、回転軸を支える「ベアリングハウジング」と、空気ポンプの役割を果たす「タービンハウジング」を主に製造。国内外のガソリン車やディーゼル車に搭載され、現在は月にそれぞれ20万個を生産できる。ターボチャージャー用以外にも、油圧部品や排気ガスを通す部品など、多品種少量生産に対応。素材の鋳造から機械加工まで一貫して担う。

新型コロナが広まった昨年以降、世界的な自動車の生産調整や原材料価格の急騰などに見舞われている。脱炭素の機運が国際的に高まり電気自動車（EV）へのシフトが加速すれば、エンジン関連部品の需要が減るのは必至。邵社長は現在の主力であるターボチャージャー部品の受注が減っていくとし、「時代の流れを直視し、適応しなければ生き残れない」と強調。自動車の駆動部品を強化するなど次代の柱の模索を始めている。

海外展開にも力を入れ、鋳物の中心に空洞を作るために入れる「中子（なかご）」を生産する子会社をフィリピンに設立。取引先の相談に応じ、海外の製造委託先を開拓して紹介するなど、目利きの力を生かした事業参画も狙う。「市場のニーズを敏感に捉え、鋳造のオールラウンダーになる」と邵社長。これまでの教訓も糧に産業の転換期を乗り越えていく考えだ。

（文・難波淳、写真・渡会浩）